人間文化創成科学論叢　第19巻　2016年

日本に居住する日系ブラジル人青年三世・四世のエスニックアイデンティティの自己認識

田　中　詩　子*

The self-awareness of ethnic identity of the third and forth generation Japanese-Brazilian youths in Japan

TANAKA Utako

Abstract

The aim of this study is to clarify the self-awareness of ethnic identity of the third and forth generation Japanese-Brazilian youths who are living in Japan. The semi-structured interviews were conducted with 10 young Japanese-Brazilian people with Japanese elementary and junior high school experience. The analysis results with regard to the self-awareness of the subjects' current ethnic identity were classified into three categories: "Brazilian identity", "Bicultural identity", and "Japanese identity". Next, the cases of the process for forming the self-awareness of ethnic identity were examined. Moreover, the following factors were considered: the influence of parent-child relationships, recognition of ethnic identity by others who know the subjects, the presence or absence of return experience to Brazil, return timing and self-determination to return on the self-awareness of ethnic identity. The following three points were revealed as factors to form the self-awareness of ethnic identity of Japanese-Brazilian youths. First, recognition of ethnic identity by others is important. Second, a good parent-child relationship has a positive effect on ethnic identity as Brazilian. Third, formation of the self-awareness of ethnic identity is associated with return timing and self-determination to return.

Keywords: Japanese-Brazilian youth, self-awareness of ethnic identity, parent-child relationship, recognition of ethnic identity by others, return timing and self-determination to return

1．問題の所在と研究目的

1990年に出入国管理及び難民認定法が改正され、日系ブラジル人の就労目的での来日が急増した。それに伴い、家族に随伴して来日する、あるいは日本で生まれる日系ブラジル人の子どもが増加していった。日本で生育する日系ブラジル人の子どもは、自分の所属するエスニック集団の文化伝承の場としての家庭と、ホスト社会文化の体系的な学びの場としての学校を基本構造とした二元的文化化の環境におかれていると指摘されている（関口，2003）。また、日系ブラジル人家族の多くは、日本経済の好不況、企業の日系ブラジル人雇用の増減といった外的な要因に影響され、具体的な将来の計画が立てられずに当初の予定よりも滞日が長引く、あるいは帰国と来日を繰り返しているという（関口，2003; 児島，2006）。このような中で、日系ブラジル人青年はアイデンティティ確立という「青年期の発達課題」(Erikson，1959　西平・中島訳，2011）に立ち向わなければならない。

キーワード：日系ブラジル人青年、エスニックアイデンティティの自己認識、親子関係、周囲の認識、帰国の時期と自発性

＊平成24年度生　比較社会文化学専攻

青年期のアイデンティティ形成を考える上で、西平（1990）の「青年期には、半ば意識的、半ば無意識的に、父母のもつ性格特性や生き方に自己を近づけようと努める。同時に承認することのできぬ特性や生き方は、積極的に排除されて、逆方向の行動をとろうとする」との指摘は重要な視点となろう。若原（2003）も、親に愛情と力を感じている青年ほど親を同一視すると述べている。さらに、先行研究を概観した鑪・宮下・岡本（1997）は、青年期のアイデンティティの発達と親子関係には有意な関連があることを示唆している。

Erikson（1959　西平・中島訳，2011）は、アイデンティティとは個人の人格的な同一性を意味しており、その感覚は個人が自分の内部に斉一性と連続性が感じられることと、他者がそれを認めてくれることの両方の事実の自覚によって成立するとしている。そのため、自分の内面の認識と周りの他者が抱く認識がずれることにより葛藤や揺らぎが生じることになる。他者の存在については、堤（2002）も、自分が自分であることは自己の内に完結するものでなく、常に他者との関係によって支えられており、「自己」の成立には常に自己ならざる「他者」という契機が必須であると指摘している。

他者との関わりは個人が所属する集団において生じる。集団の一員としてのアイデンティティを示すものとして社会的アイデンティティがあり、「ある個人の感情的および価値的な意味づけを伴う自分がある社会集団に所属しているという知識である」と定義される（Tajfel, 1981）。越（2007）は、その集団成員としての特性に適っていると思うことができれば、その集団に基づいて自己の社会的アイデンティティが保持されるとしている。そのため、集団成員としての特性が文化や民族にかかわるものである場合、社会的アイデンティティに含まれるエスニックアイデンティティの保持が自己を確立させるための枠組みにとって重要な意味を持つことになる（原，1995）。江淵（2002）は、エスニックアイデンティティの概念は、「エスニシティ」(民族的帰属性）というものの重要な一面に注目させるが、個人がその集団に「帰属意識」を抱くかどうかは、出生によって自動的に保証されるものではなく、自集団と他集団の区別が個人の相互作用の上で必要とされる状況があって初めて生まれるものであると述べている。

日本の学校における日系ブラジル人の子どもについて調査した光長・田渕（2002）によると、ほとんどの子どもが自らのアイデンティティを維持することが困難な「同化」や、外見上の明らかな違いにより集団から排除されうる「境界化」の状態に置かれているという。ここからは、子どもたちが集団の中でマイノリティとしての立場を余儀なくされ、自分は何人であるかということを日常的に意識させられていることが推測できる。日本の学校は子どもたちに自集団と他集団の区別、つまり家族や友達などのブラジル人集団と、学校の同級生や教師などの日本人集団の区別を意識させる状況であることが考えられる。

また、上述の「帰属意識」の成立要因として、江淵（1994）は、エスニック集団における自集団の成員だけが共有するという「共有感情」をあげており、個人の観点からは「自分はどこからきたのか」という「ルーツ」に関する事柄であるという。箕浦（1984）は、アメリカ在住の日本人の子どもが日本へ一時帰国して以来、日本人であると認めるようになった事例を示し、帰国は自分の「根っこ」を認識させるのに役立つとしている。

しかしながら、日系ブラジル人青年のエスニックアイデンティティ形成に関する研究では、親子関係や他者との関係性はほとんど考慮されておらず、また、かれらがブラジル人集団と日本人集団においてエスニシティを巡ってどのような認識を抱いているかという視点からの詳細な検討もされていない。さらに、帰国と来日を繰り返す家族が多いにもかかわらず、ブラジルへの帰国に関する研究は寡少である上に、ほとんどの研究はアイデンティティの問題にまで関心が及んでいないのが現状である（光長・田渕，2002）。

以上を踏まえ、本研究では日本に居住する日系ブラジル人青年が自分のエスニックアイデンティティをどのように認識しているか明らかにすることを目的とする。またその際に、かれらの体験や出来事、周りの人々との関係がエスニックアイデンティティの自己認識の形成にどのように関連しているか検討したい。

2．調査対象者と研究方法

2014年12月下旬～2015年３月にＡ県に居住する日本の小・中学校に在学経験のある日系ブラジル人青年三世および四世10名を対象にインタビュー調査を実施した。調査対象者の属性は表１のとおり、男性５名、女性５名で、年齢は19歳～28歳である。国籍は全員ブラジルで、７名に帰国経験があった。

表１　調査対象者の属性

	性別	年齢	国籍	日系	来日年齢	日本の小・中・高校在学期間	所属・立場	帰国経験
A	女	19歳	ブラジル	三世	日本生まれ	小１～高３	大学生	１～６歳
B	女	20歳	ブラジル	四世	日本生まれ	小５～高３	大学生	１歳、11歳、20歳
C	女	20歳	ブラジル	三世	１歳	小１～高３	大学生	なし
D	男	21歳	ブラジル	三世	４歳	小１～高３	専門学校生	なし
E	女	22歳	ブラジル	三世	９歳	小４～高３	社会人（専門学校卒）	なし
F	男	24歳	ブラジル	三世	３歳	小１～３、小６～高３	大学生（社会人経験あり）	８～10歳
G	男	24歳	ブラジル	四世	１歳	小１～２、小３～６、中３～高３	社会人（高校卒）	７歳、12～14歳
H	女	26歳	ブラジル	四世	６歳	小１～高３	社会人（専門学校卒）	13歳、20歳
I	男	27歳	ブラジル	三世	５歳	小１～３、小４～中３	社会人（ブラジルの高校卒）	９歳、15～18歳、20歳、22歳
J	男	28歳	ブラジル	四世	７歳	小２～高３	社会人（専門学校卒）	20歳、21歳、27歳

調査対象者には研究の目的、研究協力の自由意志、途中辞退の権利、匿名性の厳守、プライバシー保護、インタビュー結果の公表などについて説明し、研究協力の承諾の意思を確認後、署名を得た。日本語による半構造化インタビュー（60分～120分）は、了承を得た上で録音し文字化した。インタビューでは、現在までのエスニックアイデンティティの自己認識について聞き取った。具体的には、「あなたは自分を何人だと思っていますか。どうしてそう思いますか」「小・中・高校生の時は自分を何人だと思っていましたか。どうしてそう思っていましたか」「親の文化や習慣をどのように思いますか」「ブラジルに帰国した時にどのような体験をして、どのように思いましたか」などの質問項目である。

分析は、インタビューデータに基づき次のような手順で行った。①現在のエスニックアイデンティティの自己認識を確認した後、現在に至るまでの自己認識に関わる語りを抽出しカード化した。②自己認識に関連する体験や出来事、周りの人々との関係に関する語りを抽出しカード化した。③カード（①と②）を時系列に並べ、②がいつどのように①に影響したのか詳細に検討した。④各対象者の自己認識の形成過程を文字化し、図式化した。

３．結果と考察

分析の結果、対象者10名の現在のエスニックアイデンティティの自己認識については、３つに分類された。まず、D, G, H, Iは「自分はブラジル人です」と述べており、自己認識がブラジル人であることから、「ブラジル人的アイデンティティ」を形成していると考えられる。次に、Jは「日本人の部分もあるし、ブラジル人の部分もある」、E, A, Bは「ブラジル人であり日本人である」と述べており、自己認識がブラジル人でもあり日本人でもあることから、「二文化的アイデンティティ」を形成していると言える。さらに、Cは「だいたい日本人です」、Fは「日本人だろうなと思ってますね」と言い、加えて２人とも「ブラジル人とは言えない」と述べており、自己認識が日本人であることから、「日本人的アイデンティティ」を形成していると考えられる。このように３つに分類されたエスニックアイデンティティの自己認識の形成過程について、各対象者の事例をみていく。その際、各事例における特徴的な認識や語りについて下線を引いて示す。

３．１　ブラジル人的アイデンティティを形成している対象者D, G, H, Iの事例

現在、ブラジル人的アイデンティティを形成していると考えられる対象者４名（D, G, H, I）の自己認識の形成過程は、図１のとおりである。以下、各事例を示す。

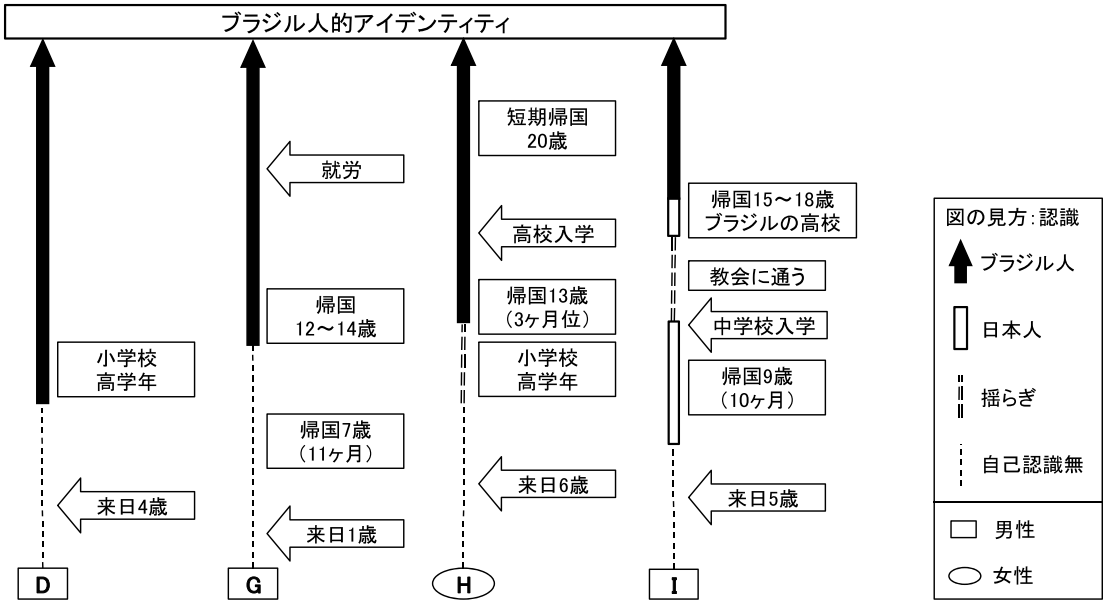

図１　ブラジル人的アイデンティティの自己認識形成過程

⑴　Dの事例

Ｄは、４歳で来日後帰国経験はない。小学校高学年からずっと自分はブラジル人であるとの認識を持っている。小・中学生の時は、「ブラジル人の友達がけんかすると心配だからみんなで行く」というような仲間意識が強かった。当時は日本語もあまりうまくなく、日本人の同級生からのいじめや差別もあったため、居心地がいいのはブラジル人の友達といるときだった。学校の規則をあまり守らずよく休んでいたので、「少し不良っぽかった」。しかし、将来のことを考えて入学した高校以降は周りの日本人とも良好な関係を築いており、専門学校卒業後は日本で働きたいと考えている。「親の普段の意識が自分達は外（ブラジル）から来ているというものだから、20年間そういう親を見てきたので、それで僕も（ブラジル人という）軸がしっかりしていると思う」と述べており、ブラジルで生まれ、親がブラジル人なのだから自分がブラジル人であるということは揺るがず、「ブラジル人ではないと考えることのほうが理解できない」と言う。

⑵　Gの事例

Ｇは、１歳で来日してから２回帰国している。１回目は小学２年生の途中（７歳）から小学３年生の初めまでだった。小学生の時は、日本にいてもブラジルにいても何人という意識は特になかった。２回目は中学校入学の時（12歳）から中学３年生の夏休み前までで、ブラジルの学校で同級生から「日本人」あるいはニックネームのような感じで「ジャップ」と呼ばれ、「僕はブラジル人なのに」と思った。高校卒業後に工場勤務をしていた頃、「工場の中にいる限り、外国人の出稼ぎと見られる」ことを知った。一方的にブラジル人の労働者集団の一員だと決めつけられることに困惑しつつも、自分がブラジル人であることを強く意識するようになった。今は「（日本の）どこに行ってもみんなが外国人という扱いをするから、いちいち気にするよりも外国人として生きていこう」と考えている。現在の自己認識については、「ブラジル人です。はっきりしています」と述べている。

⑶　Hの事例

Ｈは、小学校高学年から中学１年生までの一時期、親と外出するのが嫌だった。その理由は、外でブラジル人である親を見ると、自分も他の人から親と同じようにブラジル人として見られていることを意識したからだった。しかし、中学１年生の３学期（13歳）に短期の帰国をし、祖母や多くの親戚に会って行動を共にしたことで、自分の中の「日本人だったらこうかな」と思っていた部分がなくなった。高校では担任の先生が同級生の前で、「一人クラスに外国の子がいることはとてもいい。違う経験をした子がいることで学べる」と言ってくれて、同級生も受け入れてくれた。同じ頃に、地域では珍しいブラジル人家族の自分たちが、周りから好意的に受け入れ

られていることにも気づいた。現在の自己認識については、「感覚は日本人っぽいと思うけど、自分はブラジル人だと思う」と言う。

⑷　Iの事例

Iは小学生の時、自分は日本人だと思っていた、あるいは思い込んでいた。そのため、９歳で10ヶ月帰国した時も旅行感覚で、ブラジルの学校で同級生に「日本人」と呼ばれても違和感はなかった。しかし、中学生になった頃から、家族とブラジル人教会に行くようになり、週末は必ず教会でブラジル人の人達と過ごすようになったことや、日本人の同級生と考え方や行動が合わなくなったことで、「自分が何人かわからなくなった」。また、小学校高学年から父親の「古いブラジル的価値観」と合わず、高校進学に関してけんかになったが、結局、自分の希望を押し通してサッカーをするために単身ブラジルの高校へ進学した。ブラジルでは最初、周りから言動が日本人的だと言われ、自分自身も日本人だという認識を持った。しかし、ブラジルの高校やサッカーのクラブチームでは「日本人的にしていたらついていけないと思い、ブラジル人に近づこう、自分を変えていこうと思った」。ブラジルでの高校生活の後半になると、ブラジル人の親友や恋人もできて、ブラジル人としてのプライドを持つようになった。現在の自己認識については、「日本で働いているブラジル人。ブラジル人としてのプライドもある」と述べている。

３．２　二文化的アイデンティティを形成している対象者J, E, A, Bの事例

現在、二文化的アイデンティティを形成していると考えられる対象者４名（J, E, A, B）の自己認識の形成過程は、図２のとおりである。以下、各事例を示す。

⑴　Jの事例

Jは、高校までは友達のほとんどが地域の日本人であったが、特に違和感もなく、自分が何人であるか格別意識することもなかった。高校卒業後、工場勤務をしていた時に職場のブラジル人と交流するようになり、初めて自分がブラジル人だという認識を持つようになった。また、成人してからブラジルに短期の帰国をした時、周りから日本人であると見られ、自分でも自分の日本的な部分に気づいた。２年ほど前から両親と共にブラジル人教会に通っており、今は教会にいるときが一番居心地がいいと感じている。「（教会では）みんなミックスですね。みんなこっちで育っているから一緒なんですよ。考え方も育ち方も一緒だから」と言う。現在の自己認識につい

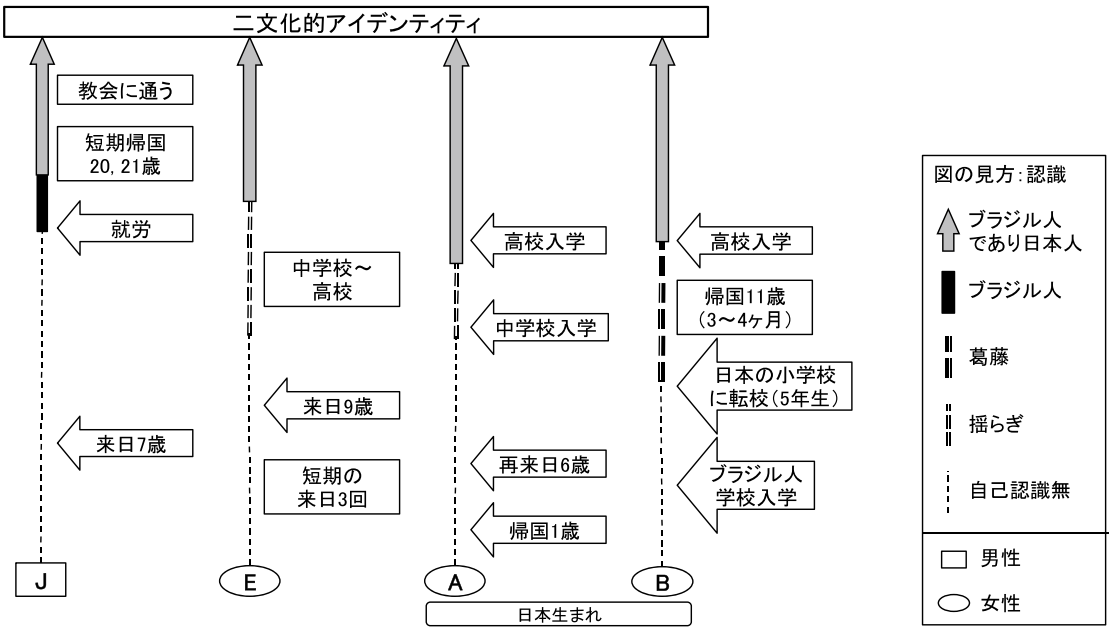

図２　二文化的アイデンティティの自己認識形成過程

ては、「間にいると思う。日本人の部分もあるしブラジル人の部分もある」と述べている。

⑵　Eの事例

Eは、９歳で来日してからはブラジルに帰国していない。ブラジルの学校ではあまりよい思い出がなく、いじめられた経験もある。日本の学校には小学４年生から通ったが、急速に日本語を覚えてなじんでいき、日本人の友達もすぐできた。中学・高校の時は、自分はブラジル人であるということを自覚しつつも、日本人になりたいと思っていた。「一番大事な時期を日本で過ごしているので、日本人と同じなんじゃないかな」と思う一方で、「国籍はブラジル人で間違いない」と外的な状況も客観的に受け止めている。現在の自己認識については、「半分半分といったところですかね。ブラジル人であり日本人であるという」と述べている。

⑶　Aの事例

Aは中学校に上がる頃、自分が周りの人よりも鼻が高く彫りが深いことなど見た目が「みんなと違うということに気づき始めて、自分が外国人であることが嫌だった」。しかし、日本人だったらと思いつつも、家庭で母親に「あなたはブラジル人だよ」と言われても自然に受け入れていた。親も、自分が学校で身につけた日本の文化や習慣を「おもしろい」と言って認めてくれた。中学２年生の終わり頃からは、日本人の友達から自分の外国人的な部分を羨ましいと言われるようになり、ブラジル人であることが肯定的に捉えられるようになっていった。今はブラジル人家族という集団の一員であることと、家庭外の日本人同輩集団の一員であることの両方を肯定的に受け入れている。現在の自己認識については、「日本人でもあるし、ブラジル人でもある。両方です」「二つの血が混じっているから、一つに絞ろうとは思わない」と述べている。

⑷　Bの事例

Bは、小学５年生の時にブラジル人学校から日本の学校に転校している。転校直後（11歳）に短期の帰国をしており、その時のブラジルの印象は、「日本とは文化や習慣が正反対の国」というものだった。転校後は日本人の子ともブラジル人の子とも合わずいじめを経験し、先生との関係も良くなかった。中学校入学後は家庭のブラジル文化が嫌で、親に対する拒否感も生じた。日本人になりたいと思ってもなれず、親も理解してくれない状況の中で、「ひとりぼっち」だと感じた。高校はブラジル人集住地域の地元を離れて近隣の市の学校へ進学したが、それを「人生の転機」だと考えている。高校では同級生や先生に受け入れられ、やっと学校に自分の居場所があると思えるようになった。「それまでは自分だけが周りと違うと感じていたのが、みんながいろいろ違うので、自分もブラジル人であっていいのかって」思った。高校入学後は、けんかばかりしていた親との関係も改善し、家庭のブラジル文化も受け入れられるようになった。現在の自己認識については、自分の内面は日本人と変わりがないとした上で、「日本人であり、ブラジル人である」と言う。

３．３　日本人的アイデンティティを形成している対象者C, Fの事例

現在、日本人的アイデンティティを形成していると考えられる対象者２名（C, F）の自己認識の形成過程については、図３のとおりである。以下、各事例を示す。

⑴　Cの事例

Cは、１歳で来日後帰国経験はなく、小学生の時は完全に自分を日本人だと思っていた。そのため、小学校でけんかをしたときなどに「ブラジル人」と言われたことにショックを受け、そのように言う日本人の子よりも「自分のほうがもっと日本語できるのにって思った」。中学校入学時に全部カタカナだった名前の姓を漢字（日本名）に変え、変えられるのであれば日本国籍に変えて日本人になりたいと思った。また、中学校入学前頃から、自分の「ハーフっぽい顔や名前」が嫌で、さらに、両親のブラジル文化や価値観に違和感や嫌悪感を抱き、日本の文化や習慣を身につけていった。今でも生活習慣や行動、考え方が両親とは違うと感じて共感できず、「両親は両親、自分は自分」と考えている。ブラジルについては自分のルーツだとは思えず、現在の自己認識については「だいたい日本人。国籍はブラジルだけどそういう（ブラジル人だという）意識はない」と述べている。

⑵　Fの事例

Fは、小学３年生から５年生までの一時期帰国している。小学校の頃は、日本にいてもブラジルにいても「親が言うので、そう（ブラジル人）なんだろうと思っていた」。しかし、中学校入学後は親に違和感や拒否感を抱くようになり、親との関係や親と自分の文化のずれについて悩む。また、中学校では、偏見を持った教師の否定

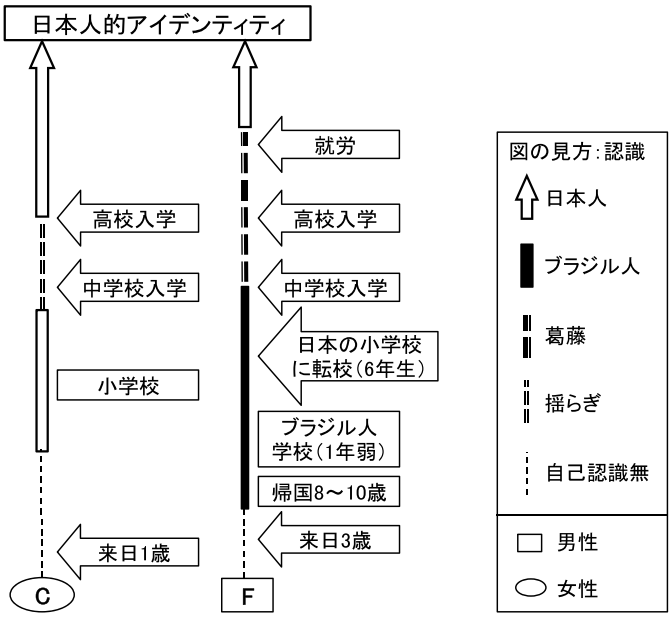

図３　日本人的アイデンティティの自己認識形成過程

的な対応、日本人の同級生の差別的な発言やいじめなどを経験した。そのような状況の中で、自分が何人かということがわからなくなり、「正直どっちでもないような気がした」。中学から高校の葛藤を抱えていた時期は、「自分は日本人だと思いたいけど、周りが見てくれないので違うよね、みたいな感じだった」。高校卒業後、就職した会社では周りの人が日本人として認めてくれたことで、自分の中では日本人というのが固まってきた。現在の自己認識については、「国籍はブラジルで書類上はブラジル人で間違いないが、自分の意識の中では自分は日本人」と述べ、今も「両親の価値観は受け入れられない」と語る。

３．４　事例から見えてきたエスニックアイデンティティの自己認識形成に関連する要因

ここでは、事例から見えてきたエスニックアイデンティティの自己認識形成に関連する要因として、親子関係、周りの人々の認識に対する意識、および帰国経験の有無と帰国年齢、帰国に対する自発性の影響について検討する。これらの要因に関しては、先述のとおり、親子関係はアイデンティティの発達との関連が示唆されており（鑪他，1997）、アイデンティティ形成には他者の存在や認識が重要であるとの指摘もある（Erikson，1959　西平・中島訳，2011; 堤，2002）。また、帰国経験については、文化差などの認識に帰国年齢が関わるとされており（箕浦，1984）、さらに、事例では家族に随伴した帰国か単身での自発的な帰国かにより体験や認識の相違がみられた。以上の要因を各対象者のインタビューデータより抽出し、まとめた結果を表２に示す。

まず、ブラジル人的アイデンティティを形成している４名は、周囲からのブラジル人であるという認識を受容

表２　日系ブラジル人青年の親子関係、周囲の認識に対する意識、帰国経験の有無と時期および帰国の自発性

	ブラジル人的アイデンティティ				二文化的アイデンティティ				日本人的アイデンティティ	
対象者	D	G	H	I	J	E	A	B	C	F
親子関係	良好	良好	良好	不和	良好	良好	良好	良好	不和	不和
周囲からのブラジル人という認識	受容	受容	受容	受容	受容	受容	受容	受容	拒否	拒否
周囲からの日本人という認識	不要	不要	不要	不要	受容	受容	受容	受容	希求	希求
帰国の有無	無	有	有	有	有	無	有	有	無	有
帰国時期	—	７歳 12～14歳	13歳 ＊20歳	９歳 ＊15～18歳 ＊20, 22歳	＊20, 21, 27歳	—	１～６歳	１歳 11歳 20歳	—	８～10歳
帰国の自発性	—	—	＊有	＊有	＊有	—	—	—	—	—

し、現在は日本人として認識される必要はないと考えている点が共通している。帰国経験は、D以外の３名（G, H, I）にあり、GとHは中学生の時に家族と共に帰国している。Gは周りから日本人として見られることに違和感を抱き、ブラジル人であるという意識が芽生えたと考えられ、Hは自己認識が揺らいでいた時期であったが、祖母や親戚に会ったことで自分のルーツが受け入れられた様子であった。また、Iは一人でブラジルへ行き、高校へ通いながらサッカーのクラブチームに所属し、自らブラジル人としてのアイデンティティを獲得したことが特徴的である。親友や恋人ができ、徐々に同輩集団への帰属意識を持つようになっていった様子がうかがえた。さらに、Iはブラジルではサッカー選手として自立していたことから、社会的役割を果たす者として社会から認められるという職業的アイデンティティ(Erikson, 1959　西平・中島訳, 2011)が形成されていたと推測できる。一方、Dは４歳で来日後帰国経験はなく、４歳以降実際にブラジルの人々や文化に接したことがないにもかかわらず、自分はブラジル文化を身につけていると言い、「ブラジルに住んでいる人は自分と同じ」と述べている。親との関係がよくないIとは対照的に、親を信頼し良好な関係を築いている様子が語りの随所にみられた。若原(2003) が指摘するように、Dは親に対する親和性を強く持ち、エスニックアイデンティティやルーツに関しても自分と親を同一視していることがうかがえることから、親の世代のブラジル文化を継承していることが考えられる。これはブラジルに渡った後も親の世代の日本文化を継承しつつ、日本人としてのアイデンティティを維持したブラジルの日系人と同様の状況であると捉えられよう。

次に、二文化的アイデンティティを形成している４名は、ブラジル人であることやブラジルのルーツを認めると同時に、自分は日本の文化や習慣、考え方が身についているとも認識している。そのため、周囲からの日本人であるという認識も、ブラジル人であるという認識も受容している様子であった。４名とも現在親子関係が良好で、Aは「家庭の中にブラジル文化と自分が外で触れている日本文化と両方あって、いつもそういうのが、ある意味ぶつかっていて、受け入れてもらうとか、分かってもらうとかいうのが日常」と語っている。ここからは、ぶつかり合いながらも互いの文化を受容し理解し合う中で良好な親子関係を築いていることがうかがえる。一方、Bは中学生の時には家庭のブラジル文化が嫌で親とけんかばかりしていたが、高校入学後自分がブラジル人であるということが受容できるようになり、親や家庭のブラジル文化も受け入れられるようになった。自分がブラジル人であることを拒否していた時には、ブラジル人の親は受け入れ難いものだったのであろう。帰国経験については、Bは11歳の時にブラジルの文化のみならず、ブラジルの日系人に対しても違和感や拒否感を抱いている。Jは成人してから単身で短期の帰国をしているが、ブラジルでは周りから日本人として扱われ、自分の日本的な部分に気がついたという。いずれの場合も、ブラジルでの体験が日本人であるという認識につながったと考えられる。

最後に、日本人的アイデンティティを形成しているCとFはともに、親子関係が良好でなく、親の文化や価値観は受け入れられないとしている。Cは家庭内で自分だけが和食を作って食べるなど、家庭の外で身についた日本文化を自ら家庭内に持ち込んでおり、Fは親子関係が悪化する中、日本文化を身につけていった。西平(1990)が指摘するように、CとFは、承認することのできない親のブラジル文化を積極的に排除して逆の行動、つまり日本の文化を身につけようとしたことが考えられる。また、Cは葛藤や違和感を抱くことなく自分は日本人だと思っていた小学生の時に、同級生からブラジル人だと言われてショックを受けて以来、周りからブラジル人であると認識されることを拒否しており、さらに、帰国経験のないブラジルについては「得体の知れない国」、ブラジル人に対しては「本当にわかり合えない部分が多く、だいぶ違う」と述べ、受け入れられない様子であった。Fは職場の人々に日本人として認められていると確信できたことで、日本人としての自己認識が固められたと述べているが、中学から高校にかけては「周辺化（境界化と同義)」と考えられる状況となり葛藤を抱えていた。ここからは、明らかな外見上の違いやカタカナの名前などにより特別視される日本社会で、日系ブラジル人青年が日本人としてのアイデンティティを形成することの困難さがうかがえる。

４．まとめと今後の課題

本研究では、３つの知見が得られた。第１に、日系ブラジル人青年のエスニックアイデンティティの自己認識形成において、周りの人々がブラジル人であると認識するか日本人であると認識するかという周囲の認識が重要

であることが示唆された。自分は日本の文化や習慣を身につけ日本人と同じだと考えていたとしても、明らかな外見上の違いやカタカナの名前などにより周囲の認識がブラジル人や外国人というものである場合、日本人としての自己認識の形成は難しくなる。そのような周囲の認識を受容してブラジル人であることを受け入れ、自己認識を形成している事例もみられたが、自己の認識と周囲の認識に齟齬が生じ、アイデンティティの揺れや葛藤が引き起こされた事例も示された。

第２に、良好な親子関係が、子どものブラジル人としての認識やルーツの継承に促進的影響を与える可能性が示唆された。親への親和性が高く親を好意的に受け入れている対象者は、自分がブラジル人であるということやブラジル文化を自然に受け入れていた。一方、親子関係が良好でない対象者は、親の文化や価値観、自分がブラジル人であるということを拒否していた。このような良好でない親子関係に加え、中学・高校時代に家庭外でも所属集団におけるアイデンティティ形成が困難で葛藤を抱えたが、その後克服した事例がみられた。

第３に、帰国時期と帰国の自発性がエスニックアイデンティティの自己認識形成に関連していることが示された。帰国時期については、10歳までの帰国では自己認識に関わる語りはみられず、11歳から14歳では自己認識に関連する内容が語られた。箕浦（1984）は、10歳までは「髪の色が違う」など具体的な差異のレベルでしか認知しないが、11歳以降は文化的な差異を認知する抽象的思考ができるようになるとしており、この指摘とも合致する結果であると言えよう。また、自発的な帰国において、短期滞在では、日本で成長した自分が身につけている日本的な部分に気づいたという事例がみられた。一方、長期滞在では、日本的な部分に気づく時期を経て、ブラジルの同輩集団に帰属意識を抱くようになり、さらに社会的役割を果たす生活者としてブラジル人的アイデンティティを自ら獲得した事例がみられた。

以上、日系ブラジル人青年のエスニックアイデンティティの自己認識形成について、事例および形成の関連要因を検討した。対象者は全員ブラジル国籍であったが、出生により自動的に与えられる国籍は自己認識を決定づけるものとは言えず、「単なるラベルだ」と断言する者もいた。一人ひとりが異なる二元的文化化の環境におかれて成長する中、様々な体験や周りの人々との相互作用を通して、多様な自己認識を形成していることが示された。今後は、日系ブラジル人青年が各所属集団においてどのような体験をし、所属集団の一員としてどのような人間関係を構築しているのか、またそれらがエスニックアイデンティティの自己認識の形成にどのように関連しているのか検討したい。

【引用文献一覧】

江淵一公　1994　異文化間教育学序説―移民・在留民の比較教育民族誌的分析　九州大学出版会.

江淵一公　2002　バイカルチュラリズムの研究―異文化適応の比較民族誌　九州大学出版会.

Erikson, E. H.　1959　*Identity and the Life Cycle*. Madison: International Universities Press.（西平直・中島由恵訳　2011　アイデンティティとライフサイクル　誠信書房.）

原裕視　1995　異文化接触とアイデンティティ．異文化間教育，９，４-18.

児島明　2006　ニューカマーの子どもと学校文化―日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー　勁草書房.

越良子　2007　中学生の所属集団に基づくアイデンティティに及ぼす集団内評価の影響．上越教育大学研究紀要，26，357-365.

箕浦康子　1984　子供の異文化体験―人格形成過程の心理人類学的研究　思索社.

光長功人・田渕五十生　2002　ブラジル人の子どもたちは、どのようにアイデンティティを変容させるのか？―帰国後の再適応を観察して―．奈良教育大学紀要人文・社会科学，51(1)，１-17.

西平直喜　1990　成人になること―生育史心理学から　東京大学出版会.

関口知子　2003　在日日系ブラジル人の子どもたち―異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成　明石書店.

Tajfel, H　1981　*Human Groups and Social Categories: Studies in Social Psychology*, Cambridge: Cambridge University Press.

鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子　1997　アイデンティティ研究の展望Ⅳ　ナカニシヤ出版.

堤雅雄　2002　「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱. 島根大学教育学部紀要，36，１-７.

若原まどか　2003　青年が認識する親への愛情や尊敬と，同一視および充実感との関連. 発達心理学研究，14(1)，39-50.